

「木琴と私」

本巣市教育委員会

野村 民子

多忙な毎日を送っていると自分のメンタルヘルスをないがしろにしていることが多く、今回この原稿の依頼をいただくことによって、自分のメンタルヘルスについて振り返る機会をいただけたことをまずもって感謝いたします。

私は、小学校1年生のときから、木琴を習っていました。毎週土曜日の午後に小学校の音楽室で木琴を教えてもらっていたのです。黒塗りの木で作られた全音部の鍵盤だけのかわいい木琴でした。バチも木で作られていました。初老女先生の歌う「タカタカタン」「タッカタンタン」というリズムが50年経っても頭の片隅に残っています。

当時の私は習い事をたくさんさせられていました。親の見栄か、果たせなかった夢をわが子に託していたのかはわかりませんが、木琴のほかにも、ピアノ、日本舞踊、英会話、習字、一週間すべて習い事に通う毎日でした。小学校低学年の時だったと思います。放課後友達と、学級農園のサツマイモ堀りを楽しんでいました。当時の学校はとても自由な気風にあふれていて学級農園で出来た野菜は担任の先生に断りさえすれば自由に収穫できるというものでした。私と友達は泥まみれになって大きなサツマイモを掘り出しては「私の方が大きい」「おもしろい形の芋やなあ」などとキャッキャッキャと笑い、叫び、遊んでいました。すると母親がその学級農園までやって来ました。恐ろしい顔をしていました。母親は「何やとるの、今日はおけいこの目でしょ、帰るよ」と言い放ち、

学級農園の周りの片付けも適当にして、家に帰りピアノの先生のうちへ嫌々行ったものでした。ピアノも日本舞踊も英会話も習字も私は大嫌いで辞めたくて仕方ありませんでした。

唯一、木琴だけは好きでした。

学校で嫌なことがあるとケースから取り出し、「キラキラ星」や「こぎつねこんこん」「かえるのうた」を奏でていました。木琴をたたいていると不思議な気持ちになりイヤな気持ちがスーッと空中分解するように消えていくのでした。

小さな木琴では演奏できる曲もほんのわずかです。大きな木琴がほしいなあ、もっとたくさんの曲を弾きたいなあと思うようになりました。

親に必死にお願いをしました。「ほかの習い事はやりたくないけど木琴は絶対がんばるから大きな木琴を買って」と。親も根負けをしたのか大きな木琴を買ってくれました。ほかの習い事も辞めさせてくれました。

買ってもらった大きな木琴は全音も半音もついています。音の変化にわくわくしながら寝食を忘れ木琴をたたいたものでした。

10歳くらいだったでしょうか。私はひどいじめに遭いました。今でいう「シカト」です。時折、振り向きざまに「うっとうしい」「変な子」「ブス」「ばか」・・・様々な罵詈雑言を浴びせられました。こともありました。一番つらかったのは、ある男の子から「**ちゃんのシャープペンを盗ってこい」と命じられた時のことで、「いやだ」と断ると学校の裏に呼び出され、唾を吐かれたり、泥をな

げつけられたりしたことでした。先生に言っても解決にはならず、親には心配かけたくないので打ち明けることはしませんでした。つらくて学校にも行きたくなくなりました。

そんなとき、木琴をたたくとつらい気持ちが和らいでくるのでした。「何を言われても気にしない。」「嫌なことは嫌とはっきり言おう。」と木琴の前に誓えるのでした。

中学生になって、もっと大きい木琴がほしくなりました。マリンバという木琴の親分にみたいな楽器です。木琴とはスケールが違います。大人2人が手を伸ばした程の長さ、ホンジュラス産ローズウッド製木目柄の鍵盤、その下についているゴールドのメッキを施した真鍮性のパイプ、一見、家具と見間違ふようなフォルムに思わず感嘆の声を上げました。

子どもの頃から慣れ親しんだ木琴はいつしかマリンバに替わっていきました。

思春期真只中の悩み多き年代には、マリンバは精神安定剤のようなものでした。

友人関係で悩んだときがありました。信頼していた友人に裏切られ、人間不信に陥り何もかも嫌になりました。夜な夜な左手首にカッターの刃を押し当てたこともありました。でもそんなときもマリンバは私の傍にありました。

悲しいときは、柔らかなマレット（ばち）で低い音をたたきました。なんともいえない温かで豊かな響きに癒されました。

このときも、木琴をたたいたときと同じ、穏やかな清々しい気持ちになりました。

成人期になり、教職につきました。荒れた中学校に赴任しました。校内暴力の嵐が吹き荒れた時代でした。暴力、学級崩壊、いじめ、毎日、日付が変わるまで生徒指導の連続でした。

「ああ、こんな仕事辞めよう、心も体も壊れて

しまう。」不眠、食欲不振、体重激減、心療内科にも通いました。始めは心療内科の受診に抵抗がありました。たまたま私の専門教科が英語だったこともあり、外国語助手のアメリカ人女性に悩みを打ち明けました。その彼女が「アメリカでは心療内科へ行くのは美容院へ行くみたいなものよ。」と話してくれました。このことがきっかけで、敷居の高かった心療内科でも受診をしました。薬の処方とカウンセリングを定期的に受けました。

ある日、勤務していた学校で、教員の一芸を披露する集会がありました。荒れた学校の集会ですから生徒たちは、私語は当たり前、漫画を読んだり、ふらふらと立ち歩いたり、奇声をあげたりで、体育館は無法地帯でした。いよいよ私の一芸を披露する番になり、マリンバを演奏しました。4本のマレットで「ふるさと」を演奏しました。すると体育館が水を打ったようにシーンとなりました。好き勝手なことをやっていた生徒たちが演奏に聞き入ってくれました。泣き出す子もいました。「癒された」と感想を言ってくれた子もいました。

私は、「この仕事を辞めよう」と悩み苦しみ、心も体も壊れかけて心療内科のお世話になったけれどマリンバのお蔭で心も体も回復してきたことを実感しました。おかげで今も教育の場で仕事を続けています。

今、人生の後半戦を生きています。加齢に拍車をかけて、仕事、その他諸々のストレス、循環器、婦人科系の臓器が悲鳴をあげている状態ですが、マリンバを叩くと何となく調子がよくなるのです。

宮沢賢治のセロ弾きのゴーシュに出てくるネズミと同じです。(ちなみに私はネズミ年ですが・・・)

心が疲れたとき、体が疲れたときいつも私には木琴（マリンバ）が傍にありました。

温かでやさしくて、軽快でリズムカルな木琴（マリンバ）の音色にいつも癒されてきたし、きっとこれからもずっと癒されることと思っています。